

知られざる保険会社 (9) 太平生命保険株式会社〔その2〕

COVID-19の脅威は依然とおさまらず、首都圏ではふたたび緊急事態宣言が発令された。「スペイン風邪」と呼称されたインフルエンザの世界的流行が大正8年から9年にかけて日本に上陸して猛威をふるった。この時も第2波、第3波が認められたので、今回の波はある程度予想の範囲内である。当時との違いは、ワクチンの開発と（少なくとも日本では）死亡者数を最小限度にとどめていることであろう。「スペイン風邪」による生命保険会社の経営に対する影響が心配されるが、第78回の連載にも触れたが、各社の営業報告書で調べるかぎり、保険金支払が経営を圧迫した会社はなかった。

今回においても生命保険会社の経営に対する不安はない。死亡保険については、次の報道からうかがえるように、むしろ逆の傾向が期待される。新聞報道によれば、昨年1月から10月までの死亡者数は、昨年比で1万4000人の減少となった（『日本経済新聞』2020年12月28日付）。理由は、いわゆるコロナ禍の中で、人々の健康や安全に対する対応がより慎重になっているためであるという。COVID-19の蔓延にありながら、社会が比較的平穏であるのは感染による死亡の可能性が相当程度低いからであろう。もちろん深刻な経済的損失や医療崩壊の可能性を考えれば、楽観主義は慎まねばならない。しかし日本の人々がCOVID-19に対して相当に健闘しているということを誇ってもよいだろう。

辞書によれば、「太平」は、「天下太平」として、「世の中が極めて穏やかにおさまること」である。世界情勢を見渡せば、多くの不安定要素があるばかりでなく、天下太平でない国々も散見される。それと比較すれば、日本は「天下太平」の部類に属するかもしれない。しかしグローバル化した世界の中で、一国だけが「天下太平」を謳歌することは無理だ。いわゆるグローバリゼーションによって、時間的に共時化し、空間的に「地続き」になっている世界の中で、「太平」ボケをしてはならない。それを承知で、新年にあたって今年が天下太平であることを祈念したい。

ということで、今回は「太平生命」の続きである。太平生命の商品と太平生命の本社社屋について言及したい。前回の記事で、同社が同時期に設立された会社と比べて比較的優れた営業成績をあげていることを示した。その秘訣のひとつは、「慈愛保険」として発売していた保険のユニークな商品性にあった。掲載した保険契約者向けご案内通知の葉書では、「獨創的小児保険、保険金が二度とれる、慈愛保険」とある。この仕組みは、慈愛保険の保険案内で図示されている。これによれば、保険料払込期間が0歳から9歳までの10年間で、21歳満期の生存保険であるが、生存者は生存保険金を給付された後、40歳を満期として生存保険金と同額の死亡保障を得られ、40歳満期時には生存保険金の3割程度の「満期祝金」が支払われるというものである。正確に言えば、9歳まで生存すれば生存保険金として、かつ40歳までに死亡すれば死亡保険金として「保険金が二度とれる」仕組みとなっている。ちなみに画像を掲載したように、保険証券には、生存保険金額と死亡保険金額が併記されている。

簡易保険の小児保険が発売されるまで、「こども保険」の主流は、生存保険と徴兵保険であったが、慈愛保険はこの中であって、連続的に死亡保障も提供する点でユニークな保険であった。

ところで、慈愛保険の「保険案内」と富国徴兵保険会社の「保険案内」の図柄に共通性がある。さらに保険通知の太平生命の本社屋と富国徴兵の本社屋が印刷されている絵葉書とを比較していただきたい。同じ建物のように見える。さらに慈愛保険の保険証券の例の取締役名に注目していただきたい。根津嘉一郎と記されている。実は、太平生命の昭和7年1月30日の臨時株主総会において経営陣の交替があったのである。同社の経営陣には、取締役社長に根津嘉一郎、専務取締役に吉田義輝、取締役に内野五郎三と小林中、監査役に石井徹が就任した。富国徴兵の経営陣が経営の実権を握ったのである。富国徴兵の経営陣は、昭和15年8月10日の臨時株主総会でいわゆる「日産財閥」に経営権を譲るまで8年余りのあいだ同社を経営した。これが図柄の共通性と本社社屋が同一であった理由である。

富国徴兵が太平生命の経営の実権を掌握した理由は、同社のユニークな「こども保険」が開拓したチャンネルに価値を見出したものと推測される。また「こども保険」というチャンネルにおける範囲の経済性を狙ったことも考えられる。しかし不明な点も多い。たとえば、合併によるシナジー効果を追求する戦略がありながら、別個の法人のまま経営したことの戦略的理由について不明である。また本社屋の「共用」が具体的にどのような契約によって行われていたのかについても現時点では詳細が不明である。要するに、太平生命と富国徴兵の関係がいつから始まって、どのように展開されたのかということが明確になっていない。

富国徴兵は徴兵保険市場において後発であるが重要な会社であり、また戦後も富国生命としてわが国の生命保険市場で重要な役割を果たしている。戦前の生命保険史において解明しておく課題であろう。

◇ 保険料拂込期日御案内 ◇

被保険者 美子殿分

拂込期日 5月11日より 半年分

保 險 料 3120

御拂込先 平野 代理店

◇上記の通り保険料の御拂込期日が参りました、どうぞ御拂込みを御願ひ致します。  
期日の前日に代理店から集金に御伺ひすることになつて居りますが若し御伺ひ致しませんでしたら御手数帳でも保全課へ御一報願ひます。

◇御轉居の場合は御面倒乍ら直ぐお知らせ下さい。

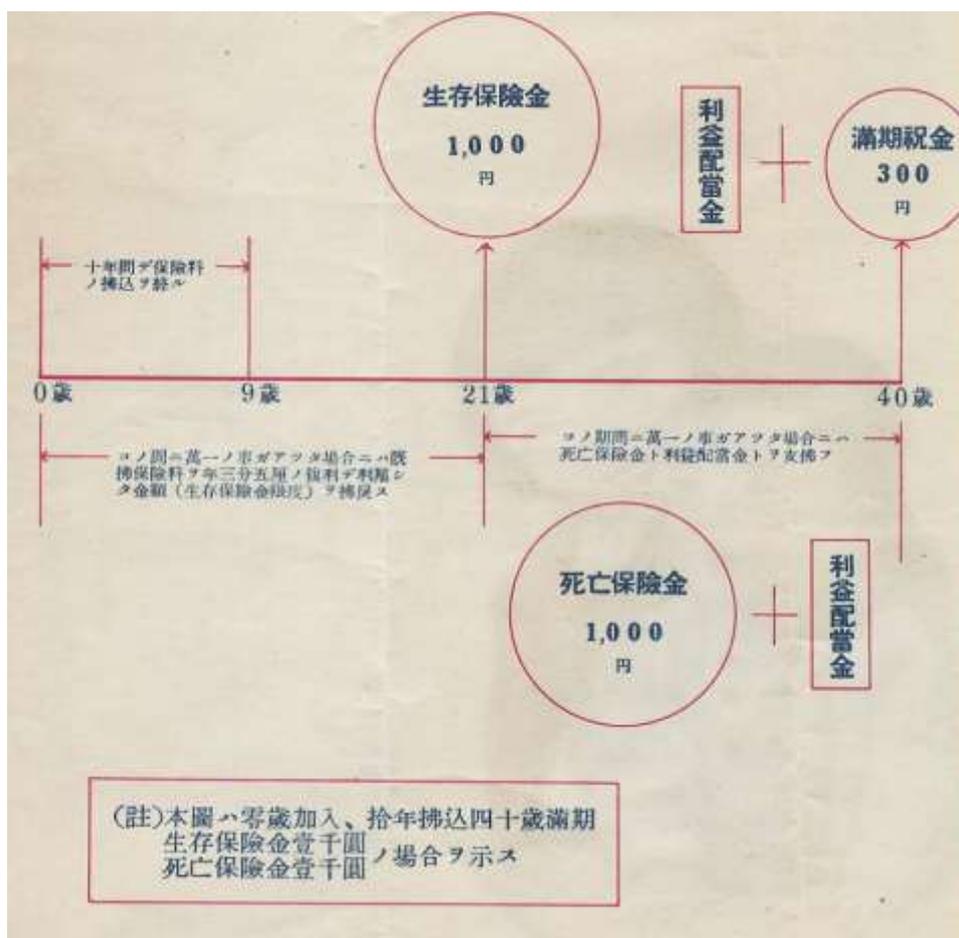
獨創的小兒保險  
保險金が二度とれる  
慈愛保險



東京・大平生命本社・日比谷

大正 15 年契約者に対するご案内通知

# 保険毎日新聞「みちくさ保険物語」087



慈愛保険の「保険案内」より



慈愛保險の保險証券の例（慈愛保險の「保險案内」から）



慈愛保険の保険案内の表紙



富国徴兵保険の出世保険の「保険案内」

